◎一般質問

○議長（斉藤　重君）　日程第１、一般質問を行います。

質問の通告がありますので、順次発言を許します。

◇　佐　藤　作　行　君

○議長（斉藤　重君）　通告順位３番、佐藤作行君。

（３番　佐藤作行君　登壇）

○３番（佐藤作行君）　おはようございます。通告に従いまして、壇上より質問をいたします。

私は、大きい項目で３点、小さい項目で各３点ずつ、計９点について、町長にお尋ねいたします。

一番初めに、防災対策について。

１．津波避難タワーの考え方は。建設の予定は。

２．緊急時、限界集落への人的補助は考えているか。

３．平成24年度松崎町総合防災訓練の滞留観光客海上脱出訓練の総括と評価は。

それから、大きい２番です。観光不況について。

１．平成３年度より長期低落傾向の宿泊客の増加対策は。

２．同じく観光不況について。風評被害対策は。

３．お花畑（桜田地区）の入客数と分析、今後の方針は。

それから、３番目が諸問題についてです。

１．水産業活性化対策は。稚貝、稚魚放流はどうなっていますか。

２．林業、主に杉林の間伐材の有効利用、再生可能エネルギーとしての検討はしているのか。

３．有害鳥獣対策、イノシシ、シカ、サルについての対策は。

以上でございます。

○町長（齋藤文彦君）　佐藤作行議員の一般質問にお答えします。

１．防災対策について。

①「津波避難タワーの考え方は。建設の予定は」についてであります。

千年に一度と言われる南海トラフ巨大地震による津波が当町へ最短で５分余で到達するとされ、津波避難ビルへの避難が困難と思われる地域の人々の生命を守る観点から、避難タワーは必要と考えます。これまでは、20.7メートルの数値が大きな壁となっていましたが、「浸水深」

が示されたことから、地域の状況にあった対応が可能になったと判断しております。

建設につきましては、避難困難地区の方々と協議を重ね、最良の地点が選択出来ればと思います。

②「緊急時、限界集落への人的補助は考えているのか」についてであります。

緊急時の連絡体制としては、町は災害等の発生後、情報収集のための情報連絡員を各地区に配置しておりますが、複数地区を担当していることから、常駐での対応は不可能です。

そのような状況をも考慮し、本年度予算で災害時孤立すると思われる集落７地区へ衛星携帯電話の配置を予定しました。この７地区の中に限界集落の３地区も含まれておりますので、町との情報の交換は支障なく対応できるものと考えております。

③「平成 24 年度松崎町総合防災訓練の滞留観光客海上脱出訓練の総括と評価は」についてであります。

当町は、東海地震等の大規模地震発生時には、土砂崩れ等により陸路が寸断され、陸の孤島となり観光客が帰宅できなくなることが予想されます。このため、今回の総合防災訓練では、海上自衛隊の協力を得て、松崎新港からの海上脱出訓練を実施したわけですが、災害時に備えて実践的な訓練を実施し、自衛隊をはじめとする防災関係機関との連携強化を図ることは非常に重要であり、意義のある訓練であったと考えております。

今後も関係機関との連携を図った訓練を積み重ね、災害に強い町づくりに力を入れていきたいと思います。

２観光不況について。

①「平成３年度より長期低落傾向の宿泊客の増加対策は」についてであります。

静岡県観光交流客数調査に基づく、平成３年度の当町の宿泊客数は 42 万 4516 人、平成 22 年度は 11 万 633 人となり、20 年間で 31 万 3833 人、74 パーセントの大幅な減となっております。

伊豆地域の宿泊客数を見ましても、平成３年度 1993 万 5000 人が、平成 22 年度には 1023 万 4000 人、49 パーセントの減、県全体でも平成３年度 2765 万 3000 人が、平成 22 年度には 1693 万 8000 人、39 パーセントの減と大きく落ち込んでおります。

観光客の減少や高齢化、後継者不足に伴い宿泊施設を廃業し、施設そのものが減少していることもあり、当時の宿泊者数を確保するということはできませんが、観光が基幹産業である当町にとって、観光客増に向けた取り組みを積極的に進めていなかければならないものと認識しております。

特に、私は就任以来「全町まるごとふるさと自然体験学校」として、第一次産業を土台とし

たグリーンツーリズムの推進を提唱してまいりました。町内でのさまざまな体験を通じて松崎町を楽しみ、何度も何度も繰り返し訪れていただける町を目指していきたいと思っております。

また、昨年から始まったオープンウォータースイミングや、今年度初の開催となるトレイルランニングレースなど、スポーツを通した新たな切り口で松崎町の魅力を内外に伝え、さらなる誘客につなげていきたいと考えております。

②「風評被害対策は」についてであります。

平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災は、直接・間接被害を含め全国的に波及し、放射能汚染や原子力発電所の安全性、津波の影響など風評被害は、観光産業にも大きな影響を与えました。

また、伊豆においても、旅行会社が海岸部への送客を控えたことや、計画停電、電車の間引き運転などにより観光客が減少いたしました。

現在、緩やかな回復傾向は見られるものの、依然厳しい状況は続いております。こうした中、町では観光協会と連携し、県内外でのキャンペーンや魅力ある事業を展開し、町への誘客を図ってまいりたいと考えております。

なお、伊豆への誘客は、松崎町、１町だけでは限界があることから、「伊豆は１つ」との考えのもと、各市町が連携して、広域的な観光宣伝事業を展開してまいりたいと考えております。

③「お花畑(桜田地区)の入客数と分析、今後の方針は」についてであります。

花の咲く町推進事業につきましては、町が推進する「花いっぱい運動」の目玉とするために、平成 12 年度から那賀地区の農閑期の田んぼを利用して大規模な花畑を造成しているものです。

来場者も平成 20 年からは６万人を超える規模となり、今年の春は、６万 1192 人（１日当り 1492 人）の来場者がありました。

また、今回、松崎町観光協会が中心となり、伊勢海老の味噌汁サービス、写し染め体験、コンサートなどの実施や売店設置でにぎわいを創出し、花畑の有効利用を図っております。

この事業もマスコミや旅行雑誌などで多く取り上げられ、また誘客キャンペーンも実施していることから、旅行業者をはじめ多くの皆さまに那賀川沿いのソメイヨシノとともに、町を代表する花の名所として認知されております。

下田市の水仙、河津町の河津桜、南伊豆町の桜、菜の花とともに、今や伊豆地域にとって欠くことのできない事業となっており、今後とも積極的な展開を図り、誘客につなげてまいりたいと考えております。

３．諸問題について。

①「水産業活性化対策は。稚貝、稚魚放流は」についてであります。

町の水産業の現状については、伊豆漁協松崎支所の市場の閉鎖など、大変厳しい状況にあると認識しております。

町としましては、栽培漁業の推進を目的にサザエ放流事業及び稚鮎放流事業に対する助成を行っております。また、昨年度には豊かな海づくり計画の一環として、松崎新港と石部漁港で、松崎小学校の児童生徒によるカサゴの稚魚の放流も行っています。その他、漁業者の資金借入に対する利子補給や、毎年、松崎沖など伊豆西南地域に伊豆地域栽培漁業推進協議会でマダイの稚魚の放流を行い資源の確保に努めています。

水産業においても、意欲のある担い手や漁業関係者の確保とともに、第２次・第３次産業と連携し、資源に付加価値を加えた６次産業化の推進を図ることが必要であると考えます。

②「林業、主に間伐材の有効利用は。再生可能エネルギーとしては」についてであります。

森林については、手入れが行き届かず荒廃化が危惧される現状であります。このような中、町としましては、国・県の事業を活用した間伐施業や木材チッパーの導入、魚礁への活用など間伐材の利用を図っています。

町では、９月補正予算において、森林整備加速化林業再生事業で、間伐と合わせた作業道の整備を行い、利用間伐材を推進するための予算を計上しました。また、地元産材の活用という観点から、現在行っている木材を利用した助成制度等の運用の見直しも検討が必要になるものと思います。

再生可能エネルギーについては、新たな成長産業育成の場として、農山漁村に雇用と所得を生み出すものと期待しております。その中でも、木材を活かした木質バイオマスの推進を図ることは、木材の有効利用と新たな産業の振興につながるものと考えます。

③「有害鳥獣対策は。（イノシシ、シカ、サル）については」についてであります。

有害鳥獣の被害は、平成 23 年度賀茂地域全体で 4700 万円と大きな被害金額となっています。松崎町においても、調査により約 400 万円の被害金額の報告があり、有害鳥獣の被害は農業者の生産意欲を大きく低下させています。

有害鳥獣被害対策については大きく分けて二つあります。

一つは有害鳥獣の捕獲です。

駆除・捕獲の実施主体となる猟友会には、駆除協力事業費を助成し捕獲体制の強化を図っています。しかし、今後会員の高齢化と減少も見込まれることから、町では狩猟免許の新規取得者

に対して、狩猟免許取得費用を助成する事業も行っています。昨年、国の交付金事業を活用して19名の方が新たにわな免許を取得しました。

また、サルの捕獲については、１頭１万円の奨励金を交付していますが、今後は、イノシシ・シカの捕獲奨励金についても近隣市町の状況を参考に検討したいと考えています。

二つめは有害鳥獣に対する被害防除です。

町では有害鳥獣被害防止対策事業で、農地に電気柵やワイヤーメッシュ柵等を設置する経費の２分の１、限度額10万円の補助を行っています。また、地域ぐるみで鳥獣を寄せ付けない取り組みとして、地域住民を対象とした鳥獣被害防止講習会の開催や、捕獲機材及び追い払い機材の貸し出しなどを行っています。

今後も地域の状況を踏まえた効果的な対策を実施するため、町・県・農協・猟友会・農林業関係者が連携して、地域全体で有害鳥獣対策に取り組んでまいりたいと考えています。

以上でございます。

○３番（佐藤作行君）　これより一問一答にて質問を行いたいと思います。

○議長（斉藤　重君）　許可します。

○３番（佐藤作行君）　１番目の防災対策についてです。

先日、菊池三郎課長、新田君と３人で県庁の方へヒアリングということで、出向いて行って来ました。その際に、他市町の様子をちょっとお伺いしてきたわけなんですが、津波避難タワーの要望と、それから、もう一つ、災害時オフサイトセンターの設置というのが各市町から要望としてだいぶ上がってきているという話でした。

それで、当町としては、災害オフサイトセンターにはどのような考えでいるのか、ちょっとお伺いしたいと思います。

○町長（齋藤文彦君）　昨日の一般質問でもお答えしたわけですけれども、松崎町の役場の災害対策本部があるところ、２階は9.9メートルあるわけですけれども、今度の南海トラフの最大浸水深は、内閣府から発表されるのは4.5メートルということで、それなりの・・、あれは千年に一度の災害ですから、多分この今の役場の庁舎で大丈夫ではないかなと私は思っているわけですけれども、オフサイトセンターというのを、いろいろな皆さんのことを考えて、これから研究していく課題だと思っています。

また、昨日も言いましたけれども、２階にサーバ室というのがあるわけですけれども、サーバ室を牛原山の方へ移動すると、非常に目に見える所にありますので、役場の方に災害対策本部を置いてもそれなりのことができるというようなことを聞いていますので、そのようなこ

とから、町としても全然考えていないわけではありませんので、そのようなことを考慮しながらやっていきたいなと思っています。

○３番（佐藤作行君）　それから、現在指定されている避難ビルですね。それから、避難路、そういうものが指定されているわけですが、それの収容人員と言うんですか、それは大体どのくらいあるのでしょうか。大ざっぱでいいです。

○総務課長（金刺英夫君）　すみません。調べてまたご連絡申し上げます。

○３番（佐藤作行君）　それで、浸水予想地域、第４次被害想定で示された対象人口は大体どのくらいになるのでしょうか。大ざっぱで結構です。

○総務課長（金刺英夫君）　今回８月29日に公表された津波浸水区域の理解でよろしいでしょうか。

（佐藤議員「はい」と呼ぶ）

○総務課長（金刺英夫君）　ほとんどの松崎町内、松崎５区、桜田、伏倉、宮内、それから、道部の一部というふうな形になりますので、おそらく、町の半数近く、ですから、4000近くの人口があるかと思います。概算で申し訳ありません。

○町長（齋藤文彦君）　第３次被害想定の・・、第４次被害想定ではありませんけれども、それだと、931世帯、2354人というようなことになっているわけです。だから、それの倍以上くらいになるのではないかと・・。

○３番（佐藤作行君）　そうするとですね。被害想定人口よりもおそらくこの避難ビルの収容人員の方が圧倒的に少ないと思うわけですよね。そうすると、溢れた人はどこへ行くのか。

想定が５分ということになると大変、行く所がなくてブクブクをする人が多くなるんじゃないかと思うわけですが、そこらの危機感というか、感覚というのはどんなものでしょうか。

○町長（齋藤文彦君）　数字が一人歩きをして非常に怖いところがあるわけですけれども、昨日も言いましたように、「釜石の奇跡」という中で、子どもたちがハザードマップを作って自分たちが逃げる場所とか、逃げる道とかがちゃんと自分の頭に入っていたというようなことがありますので、議員さんの質問に、直接ではないわけですけれども、やっぱり地区の皆さんともう一度ちゃんと集まって話をしてもらって、避難路と避難ビル、どこに逃げるかというのをちゃんと決めていきたいなと思っています。

昨日も言いましたけれども、危機管理局の方で10月から松崎と下田と南伊豆の方で、避難路と避難タワー、避難ビル等についていろいろ住民の皆さんを集めてやるそうですけれども、それに松崎町も参加して、そのようなことをちゃんともう一度本当に煮詰めていきたいなと思

っています。

○３番（佐藤作行君）　ぜひそこらの詳細を詰めていただいて、一人でも多くの方が救出されるように、生命を失うことのないようにぜひ考えていただきたいと思います。

　それから、河口堰、ちょっと関連してなんですが、この河口堰の建設と避難タワーの建設ということは、まったく矛盾することはないと思っていますが、町長の考え方の確認をもう一度したいと思いますが、よろしくお願いします。

○町長（齋藤文彦君）　私は避難タワーも必要だと思いますけれども、それと同時に水門も必要だなと思っています。ただ、さっきの質問に答えますけれども、やっぱり災害というのは、自分の命は自分で守る。家族の命は家族で守ると、こういう意識がないとどうしようもないと思っていますので、ここをやっぱり基本に入れていただきたいなと思っています。

○３番（佐藤作行君）　そこらは、町長の言うとおりのところもあるわけですが、数学的にやっぱり避難場所の収容人員が対象人員より圧倒的に少ないということは、やっぱり逃げられない、入れない方がかなり出るということは事実のわけですから、やはりそこらは充分考慮していただきたいと思います。

　次に移ります。緊急時の限界集落への人的補助の関係です。あと、これにちょっと関連してなんですが、他市町の議員に聞いた話なんですが、近隣市町なんですが、使える井戸、それから、使える湧水場所、そういうものを調査して、既に水質検査も済ませてあるというようなことなんですが、水については、１日１人３リットルというのが、どうしても人間は必要なんだそうです。それで、松崎町の場合、使用可能な井戸あるいは湧水箇所、そういうものの調査なんかはしておられるのでしょうか。

○総務課長（金刺英夫君）　湧水の場所というのは、大体地域に住まれている方ですので、ここの地区はここで湧いているというふうな形のものはそれぞれ理解していただいていると思いますけれども、井戸につきましては、町の方としては特にまだ今のところそういった調査はしておりません。

　今後、そういった大変いいご意見をいただきましたので、そういったことにつきましては、また調査をさせていただければと思います。

○３番（佐藤作行君）　そうすると、当然水質検査なんかもしていないわけですね。やるような考え方はありますか。

○総務課長（金刺英夫君）　実際にその井戸が災害時に使えるかどうかということも諸々判断してまいりますと・・。

（佐藤議員「井戸だけじゃなくて、湧水も」と呼ぶ）

○総務課長（金刺英夫君）　通常井戸は平地にありますので、おそらく浸水域の井戸というのは、ほとんど使えなくなると想定されます。あと、湧水というのは山麓に多いものですから、そういったものの調査というのは、やはりしておくべきかなと、ほとんどは煮沸すればこの近辺でしたら問題ないかというふうに考えておりますので、また状態によってその辺は考えてみたいと思います。

○３番（佐藤作行君）　それでは、次に移ります。

今年、海上自衛隊の「つのしま」というのが外部新港へ接岸して避難訓練を実施したんですが、町長としては、来年以降もこのような訓練を実施する予定はあるのかどうか。

○町長（齋藤文彦君）　毎年やっていきたい。年に１回というより回数を重ねていきたいなと思っています。

今回、「つのしま」は540トンですけれども、もうちょっと大きな船が着けられるのか、いろいろなチャレンジをしてみたい。本当に災害の時に活用できるような形にしていきたいなと思っています。

また、９月７日の新聞の方にも海上自衛隊の方で訓練を伊豆半島各地で年間を通じて実施したいというようなことを言っていますので、そのようなことをかみ合わせて、何回も訓練を繰り重ねていきたいと思っています。

○３番（佐藤作行君）　それでは、次に移らせてもらいます。

観光不況の関係なんですが、県のパンフレットなんかを見ますと、東伊豆観光圏という設定がしてありまして、それには伊東から南伊豆町までがひとくくりになって、エリア的に載っているわけですが、松崎町はこれに入っていないというのは、何か理由があるのでしょうか。

○企画観光課長（山本　公君）　何年か前に観光圏ということで、伊東の方から南伊豆までだったですかね。そこの市町が加盟をしているということで、当時、伊豆急線の沿線の市町を中心に入ったということで、西伊豆・松崎が入っていなかったというような経過がございます。

ただ、先ほど町長が申し上げましたように、「伊豆は一つ」というようなことの中で、観光施策を進めていかなければならないということでありますので、観光圏及び伊豆地域の中で観光推進協議会等の協議会等もありますので、その中で連携をしていきたいというふうに考えておりますけれども、観光圏の関係につきましては、今後の検討の課題ということで進めさせていただきたいと思います。

○３番（佐藤作行君）　次に進みます。

風評被害についてですが、町長にはこの風評被害を打破する対策みたいなものは何かお持ちでしょうか。

○町長（齋藤文彦君）　風評被害を打破するのは非常に難しいわけですけれども、町が元気になるしかないなと思っているところでございます。

伊豆半島の６市６町の皆さんと話をするわけですけれども、私は、伊豆半島の６市６町というのは、伊豆半島という旅館のそれぞれの部屋があると、それで、それぞれの特色がある部屋を作って、観光客の皆さんにそれぞれ特色のある部屋に泊ってもらいたい。「今回はこの部屋に泊ったけれど、こっちもいいな」と、「次はこの部屋に泊まりたいな」というようなことをして、伊豆半島が一つになってやっていく以外にこういう風評被害を払拭することはできないと思っていますので、そのようなことを各市町の首長と話し合っているところでございます。

○３番（佐藤作行君）　それでは、その次のお花畑の入客数と分析、今後の方針なんですが、町長の話によると大変来客数も多くて、賑わっているという・・、それで、評判も大変いいというようなことです。大変結構なことだと思うんですが、これは今後とも継続して続けていくという理解でよろしいでしょうか。

○町長（齋藤文彦君）　よそに行って松崎町のパンフレットとかを見ますと、必ず花畑とか棚田というのが出ていますので、せっかくこれだけ育ててきたわけですから、これからも継続していきたいなと思っています。ただ、町がこういうことをやったから、本当に観光業者の方が・・、今年は観光協会がいろいろなイベントを打ってくれたわけですけれども、やっぱりそこでコンサートをやるとか、写真コンテストをやるとか、花の日を決めて、今日は風呂に花が入っているとか、そのようなことをいろいろやっていけば、必ずものすごく広がっていくと思いますので、そのようなことを踏まえて、これからも進めていきたいなと思っています。

○３番（佐藤作行君）　それでは、拡大しながら続けていきたいというような理解をしておきます。

次に、諸問題についてです。「水産業活性化の対策は」についてです。

町長の話では、サザエ、稚アユの放流、カサゴの放流を行っているということなんですが、その他にこういうものを、イセエビですとか、アワビの放流だとか、そういうようなことに拡大するような考え方はありますでしょうか。

○町長（齋藤文彦君）　これは町がというよりは、漁協が組合長以下、伊豆漁協が頑張ってくれなければ、どうしようもないわけで、そのような中で町も協力してくれないかというようなこ

とになれば、いろいろ協力するわけですけれども、町から「どうですか」と、なかなかそうはいかないと思いますので、漁協に元気になってもらいたいなと思っています。

佐藤議員も漁業には非常に詳しいわけですから、いろいろアドバイスがあったらいただきたいなと思うところでございます。

○３番（佐藤作行君）　この水産業の活性化ということは、やはり来たお客さんがおいしい魚を食べたい、それから、新鮮な貝も食べたい、新鮮なイセエビも食べたいということですので、やはり水揚げは年々減少して、足らなくなると業者は志摩半島の方から持って来たり、房総半島の方から持って来て、イセエビなんかを売っているわけですが、やはり本当の意味の伊豆の味ということになりますと、やはり伊豆のイセエビを食べなければ、やっぱり本当の味はわからないと思うわけなんですが、町長は、そこらは同じような考え方ですかね。

○町長（齋藤文彦君）　そのように思います。何と言いますかね。やっぱりぼくらの住んでいる地域を見ましても、本当に漁業で生活しているという人、専業はほとんどいないわけで、みんな片手間にやっていると、遊びの一部としてやっているというような感じですので、なかなか地元の魚を食べるというのが非常に難しくなってくるところがあると思いますけれども、やっぱり伊豆に来たら伊豆のイセエビの刺身を食べたいと思うのは、そのとおりだと思います。

○３番（佐藤作行君）　魚の話ばかりしていますと、私の趣味みたいに思われてしまいますので、次に移ります。

次は、林業です。いまスギ林、ヒノキ林の間伐を主に森林組合が行っているわけなんですが、間伐材が非常に、市場価格が低迷しているということで、現在のところ切りっぱなし、伐採しっぱなし、その後は、山林に放置して腐るのを待つというような形になっているんですが、これは、ほかの県なんかでは、集中豪雨の際、そういう間伐材の放置したものが河川に流れ出して、それで橋を壊したり、それから、氾濫した時は家屋を壊したりというような２次災害をだいぶ引き起こしているという現象があるということを聞きましたけれども、そこらの対策と言うんですか、そこらはどんなふうに考えていますでしょうか。

○町長（齋藤文彦君）　対策といってもなかなか対策は難しいわけですけれども、私は草刈りが趣味ですから、結構山の中を歩きますけれども、歩いていて、本当に木が倒木されて、そのままほっぽかされたのを見ると、本当に悲しく思うわけですけれども、これがうまく再利用できればいいかなと思うわけですけれども、なかなか難しいところがあると思います。

ただ、松崎町は広大な雑木林があって、桜の木を炭にして「伊豆炭」ということで、桜を切ると非常に景色がきれいだということでやったわけですけれども、そのようなことから山口

の方で炭焼きうんぬんの話を聞いていますけれど、なんかそのような伊豆に合ったことでやっていく以外になかなかないのかなと思っているところでございます。

○３番（佐藤作行君）　そこらの話は、やっぱり国・県サイドのＣＯ２の売買の問題が片付かないとなかなか前に進まないだろうというような話を私も聞いているわけなんですよ。

ですけれども、集中豪雨だとか、台風の時に被害を増大させるというようなことを考えますと、やはり県・国と協力してやはり有効エネルギーあるいは再生可能エネルギー、ペレットとか、そういうものに有効利用していただきたいと思っているわけなんです。そこらにしておきます。

次に移ります。有害鳥獣対策についてです。

岩科に限らず、これは松崎町全部だと思うんですが、イノシシ、シカ、サルがだいぶ増えているんじゃないかというような話も聞いているわけなんですが、捕獲の去年あたりの実績なんて言うのは、わかっているでしょうかね。

○町長（齋藤文彦君）　ちょっと資料をもらってありますので、イノシシが昨年は497頭捕っています。シカが274頭、サルが12頭捕っています。

○３番（佐藤作行君）　先ほど町長の話で、サルにも捕獲補助金ですか、１万円を交付するようにしたというような話なんですが、他市町では、町独自で捕獲奨励金と言うんですか、そういうようなものを交付しているというようなことも聞いているわけなんですが、そこらはどのように考えているでしょうか。

○町長（齋藤文彦君）　一応奨励金は各市町のやつがわかっているわけですけれども、松崎町は、サル１頭について１万円だけで、イノシシ、シカは付けてありません。下田市はシカが3000円とか、東伊豆はイノシシ、シカが5000円、サルが３万円といろいろあるわけですけれども、ただ、これは奨励金をやればやるのかなというような問題ではないのではないかと私は思っています。ただ、奨励金を上げたらみんなが捕るということではないのかなと思っています。

ただ、猟友会は松崎には50人うんぬんの話は聞いていますけれども、実働部隊は非常に少ないと、老齢化して動きが取れないというようなことを聞いていますので、そのようなことを、全体のことを考えてやっていかないと難しいのかなと思っていますので、そう簡単な問題ではないわけで、だけど、これだけ被害があるわけですから考えないわけにはいかないわけですけれども、そのようなことを加味しながらやっていきたいなと思っています。

○３番（佐藤作行君）　この問題なんですが、ほかの市町で聞きますと、やはりいろいろ問題はあるらしいんですよ。ですが、やっぱりそれをやったことによって捕獲数が増えたり、実際に

被害が減少したりということであれば、そういうものを設置してもいいんじゃないかと私は思っているわけなんですが、そこらはどんなふうに思っていますか。

○町長（齋藤文彦君）　いろいろ市町の話を聞いて、担当者とも話して、どのような形が松崎町にとって一番いいのかというようなことを考えてやっていきたいなと思っています。

○３番（佐藤作行君）　５分前になりましたので、まとめに入りたいと思いますが、いろいろ質問したわけなんですが、町長も前向きな形で各施策について取り組んでいくというような方向ですので、ぜひその方向で検討なり実施なり、被害も少なくなるようにまい進していただきたいと思います。

ありがとうございました。

○議長（斉藤　重君）　以上で佐藤作行君の一般質問を終わります。

暫時休憩いたします。

（午前　９時４６分）